

本報告書は、2013 年の春と夏に CIEE が実施した短期海外研修に参加した大学生を対象として行った web 調査の結果を、海外研修に関わる大学の教職員の皆様向けにまとめたものです。CIEE 主催のセミナーでご報告した後に、「自信尺度」に興味を持たれた方々から使用してみたいという声をいただきました。そこで、今回改訂版を作成するにあたり、少人数を対象として診断的に利用できるようエクセルを使用した回答の処理手順を簡単に添付資料 1 に追記しました。

ご意見やご質問等ございましたら info@ciecej.or.jp までお知らせいただけますよう、お願い申し上げます。

CIEE アンケート調査結果報告 I

—短期海外体験には自信感や国際志向性を向上させる効果があるのか—

エグゼクティブ・アドバイザー 仲野友子

1. 調査の背景

「グローバル人材育成」が時代のキーワードの 1 つとなっている。現在推進されている政策は、グローバル人材育成推進会議が 2011 年に発表した「中間まとめ」で述べられているグローバル人材に求められる能力や資質の向上を基調としている。CIEE は、その能力や資質の中から、チャレンジ精神に着目した。チャレンジ精神は、最も多くの企業からその必要性を指摘されている素質でもある(社団法人日本経済団体連合会, 2011)¹。そして、チャレンジ精神には自己評価、特に自信が影響していること、また、海外でボランティア活動をしてきた学生が「自信がついた」と報告していること、自信尺度(高井, 2011)²が開発されていること、などから CIEE が実施している短期の海外体験プログラムが自信感にどのように影響しているのかを調査するに至った。

2. 調査の目的

実務の経験を通して CIEE スタッフが抱いている感覚的な印象を検証することを目的とした。これらは、1) 短期であっても海外体験には自信感を向上させる効果があるのではないかと、2) 外国語を学ぶ語学研修よりも外国語でボランティア活動をする参加者の方が自信は伸びるのではないかと、3) 海外体験はキャリアプランにおける国際志向性を高めるのではないかと、の 3 つの事柄である。また、「自信感」が下がったグループと「自信感」が上昇したグループの間に何か差異があるのか探索を試みる。これらの調査結果から、海外派遣に関するいくつかの提言を行う。

1 社団法人日本経済団体連合会 (2011). 産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果

2 高井範子 (2011). 自信感形成要因および自信感の発達的变化 健康心理学研究, 24, pp.45-58.

3. 調査方法

3.1 調査協力者

CIEE が大学からの委託事業として実施している語学研修に派遣した大学生 1,480 人と、CIEE が海外のボランティア団体と実施しているボランティア活動に派遣した主に大学生 833 人の合計 2,313 人を対象に web 調査³を実施した。

参加前と参加後の両方に回答した有効回答は 475 であった(有効回答率 20.54%)⁴。

3.2 調査手順

<第 1 回 web 調査(出発前)>

春の実施期間:2013 年 1 月~2 月、同年夏の実施期間:6 月~8 月

語学研修の場合は、派遣大学の同意を得て、出発前のオリエンテーションで調査の趣旨に関する資料を参加者に配付し協力を呼びかけた。その後、電子メールで web 調査の URL を配信し回答を依頼した。ボランティア活動の場合は、質問紙を参加決定者に送付し、CIEE に提出が求められている書類とともに返送する方法をとった。

<第 2 回 web 調査(帰国後)>

春の実施期間:2013 年 3 月~4 月、同年夏の実施期間:9 月~10 月

参加者の帰国後 1 週間以内を目処に、電子メールで web 調査の URL を第 1 回協力者に配信した。

いずれも任意による協力である。

3.3 質問項目

第 1 回と第 2 回の質問項目は以下の通りである。選択回答法による評定は 6 件法を用いた(一例:「1 全く当てはまらない」「2 あまり当てはまらない」「3 どちらかと言えば当てはまらない」「4 どちらかと言えば当てはまる」「5 かなり当てはまる」「6 非常に当てはまる」)。

<第 1 回 web 調査> ※は第 2 回 web 調査にも含まれることを示す。

- 1) 性別、年齢、所属大学・学部、参加するコース名
- 2) 過去の海外滞在期間(年/月/週)
- 3) 保有する英語資格試験の成績(TOEFL®テスト、TOEIC®テスト、英検、GTEC、その他)
- 4) 海外滞在中に使用する言語の使用不安感 ※
- 5) 高井(2011)が開発した自信感尺度(別添資料 1)※

³ 株式会社パイブドヴィッツによる情報管理システム「スパイラル」を利用。

⁴ 春に実施した web 調査のデータは、青山学院大学大学院国際政治経済学研究科に提出した修士論文に使用した。

- 6) 1 年間交換留学の希望 ※
- 7) 海外の大学院で学ぶ希望 ※
- 8) 外国語を使う仕事に就く希望 ※
- 9) 海外で働く希望 ※

<第 2 回 web 調査>

上記の 6 つの※が付けられた項目以外に以下の質問項目を含めた。

- 1) 訪問国で使用した言語⁵の、聞く、話す、読む、書くの各技能が身についたか
- 2) 訪問国で使用した言語を今後さらに勉強したいか

3.4 自信感尺度

「自信感」を「自分のあり方に自信を持っている感覚、あるいは、自分に対して自信をもって生きていると感じられていること」と定義して、大学生および大学生を除く成人男女 20 代～70 代を対象に調査を行い開発された自信感尺度(高井, 2011)を使用した。この尺度は 14 項目からなり、「自己肯定感」、「人間関係構築力」、「有能感」、「立ち直り力」の 4 因子で構成されている(別添資料 I ご参照)。

海外体験では、初対面の人々との関係の構築力が求められ、また、現地のことばの運用力が不足していたり、自文化ではあたりまえの考え方や行動様式、価値観が通用しなかつたりと困難に直面し気落ちすることが推測される。そこから立ち直れるか否かで自己評価が変わってくるであろう。よって、高井が開発した「自信感」の 4 因子は異文化体験とも親和性が高いと考えられるため使用した。

3.5 データ分析方法

IBM SPSS Statistics 22.0 を用いて分析した。海外体験が「自信感」やキャリアにおける「国際志向性」、「外国語使用不安感」にどのような影響を与えるかを検証するために、対応のある t 検定を用いて参加前後の測定値の変化を検討した。また、参加前後(以下、Pre・Post)要因と、性別や参加プログラムなどの属性要因の組み合わせが、「自信感」や「国際志向性」にどのような影響を与えるかを検討するために 2 要因混合計画分析を行った。

4. 結果

4.1 調査協力者

調査協力者は 475 人で平均年齢は 20.15 歳($SD^6=2.04$)である。社会人大学院生が 1 人おり、それ以外は大学院生を数名含む学部生である。所属大学数は 68 校である。

男子学生は 164 人(35%)、女子学生は 311 人(65%)で、理系男子学生は 53 人(11%)、文系男

⁵ 語学研修に参加した学生のごく一部は、訪問国の言語(フランス語、ドイツ語)を学んでいる。

⁶ Standard Deviation(標準偏差)

女子学生は 111 人 (23%)、理系女子学生は 41 人 (9%)、文系女子学生は 270 人 (57%) である (図 1)。

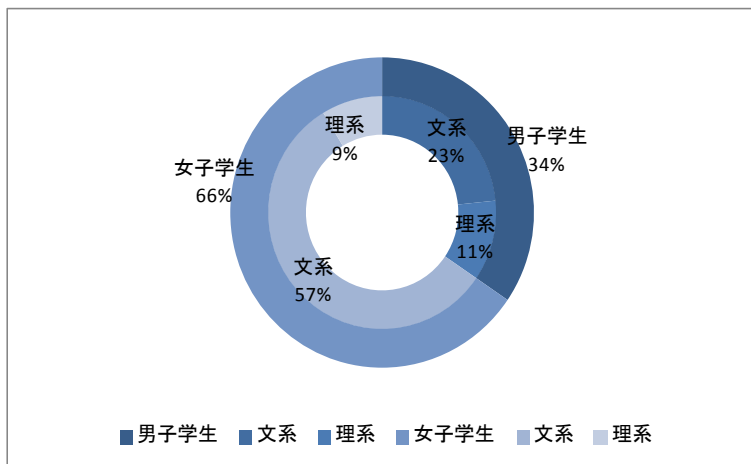


図 1 調査協力者の性別と専攻別の割合 N=475

目的別による内訳をみると、語学研修の協力者は 323 人 (68%) で、ボランティア活動の協力者は 152 人 (32%) である。

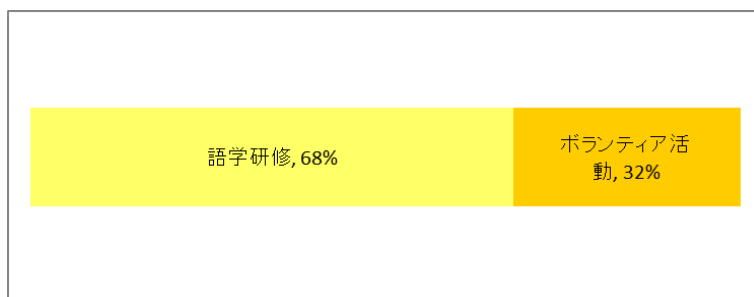


図 2 語学研修とボランティア活動グループの調査協力者の割合 N=475

目的別協力者の居住地 (所属大学の所在地に基づく) と訪問国の比較は表 1 の通りである。両グループともに居住地は関東・信越地区の割合が高く、訪問国は、語学研修グループでは 90% 近くが英語圏⁷であり、ボランティア活動グループでは、英語圏は半数強の割合である。

⁷ オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、カナダ、イギリス。

表 1 目的別グループの協力者の居住地と訪問国の比較 N=475

	語学研修 グループ		ボランティア 活動グループ	
	人数	割合	人数	割合
居住地				
北海道地区			2	1.32%
東北地区			1	0.66%
関東・信越地区	288	89.16%	115	75.66%
中部地区	20	6.19%	1	0.66%
近畿地区	3	0.93%	30	19.74%
中国地区	10	3.10%	0	
四国地区	0		1	0.66%
九州地区	2	0.62%	1	0.66%
沖縄	0		0	
訪問国				
英語圏	283	87.62%	83	54.61%
アジア圏	18	5.57%	24	15.79%
ヨーロッパ圏	22	6.81%	39	25.66%
中米	0		6	3.95%

語学研修グループ 323 人のうち、男子学生は 121 人(37%)、女子学生は 202 人(63%)で、理系男子学生は 43 人(14%)、理系女子学生は 30 人(9%)である(図 3)。

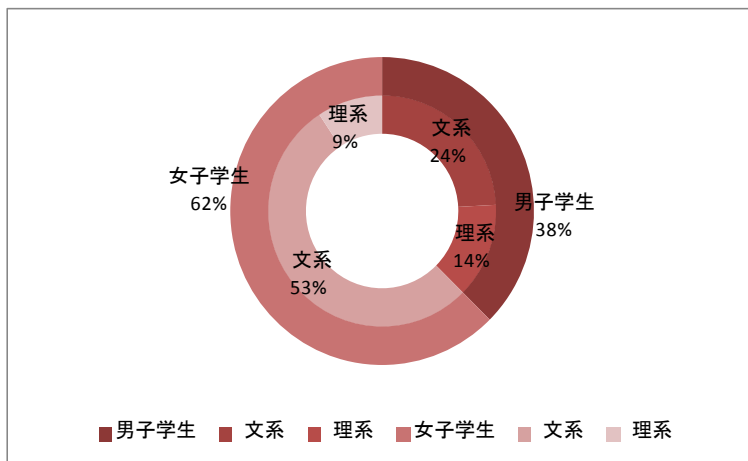


図 3 語学研修グループの調査協力者の性別と専攻別の割合 N=323

ボランティア活動グループ 152 人のうち、男子学生は 43 人(28%)、女子学生は 109 人(72%)で、理系男子学生は 10 人(7%)、理系女子学生は 11 人(7%)である(図 4)。

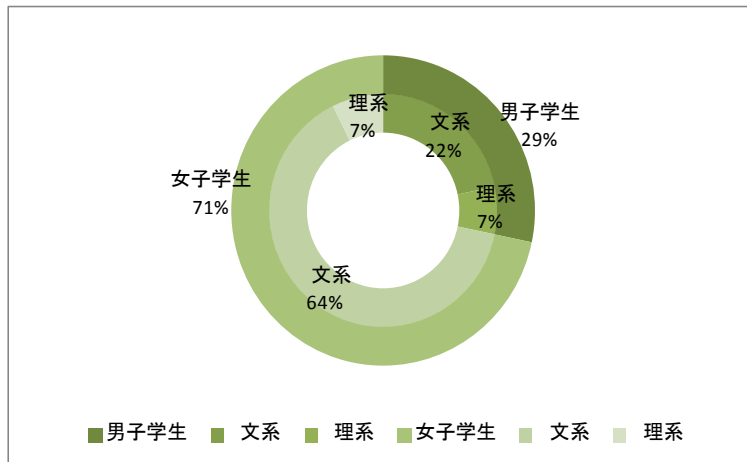


図 4 ボランティア活動グループの調査協力者の性別と専攻別の割合 N=152

語学研修グループの方が、ボランティア活動グループに比べ、理系男子学生の占める割合がやや高く、文系女子学生の割合がやや低くなっている。この理由は、語学研修グループは数校の派遣大学が、理系の学生を対象とした派遣プログラムを実施しているためと推察する。

4.2 過去の渡航経験

過去に渡航経験がない協力者は、語学研修グループで 27.55%、ボランティア活動グループで 27.63% とほぼ同じ割合である。渡航経験者のうち 1 ヶ月以内の海外滞在が、語学研修グループは 77.09%、ボランティア活動グループは 65.79% である。1 年を超える者は、語学研修グループで 8.67%、ボランティア活動グループで 11.84% である。

4.3 今回の海外滞在期間

語学研修グループは最短期間が 3 週間、最長期間が 6 週間で平均は 4 週間である。一方、ボランティア活動グループは最短が 1 週間、最長が 5 週間で平均は 2.5 週間である。

4.4 調査協力者が有する外国語資格試験の成績

TOEFL[®]テスト、TOEIC[®]テスト、英検などのスコアや級が報告された。英検 3 級は中学校あるいは高等学校の低学年で取得した可能性が高く現在の英語力との間に乖離があると推測し分析の対象から除いた。

異なるテストの成績を相対化し比較することは非常に困難であるが、本調査では、TOEFL ITP[®] テストのスコアを基準として他のテストの成績を 6 段階で分類することを試みた(表 2)。アメリカの大学の入学資格の要件となる英語力は、「一般的に、大学学部課程に必要なスコアは、TOEFL[®]iBT 61 点 (TOEFL[®]PBT 500 点) 以上、大学院課程では、TOEFL[®]iBT 79-80 点 (TOEFL[®]PBT 550 点)

以上といわれている」(日米教育委員会)⁸。TOEFL ITP[®] テストは TOEFL[®]PBT と高い相関関係があることから、その目安に準拠すると、約 40%が学部課程の要件とされる英語力をクリアしていることになる(図 5)。

日本人が求められる英語力の具体的な指針として、外国語能力の向上に関する検討会(2011)⁹が、「高等学校卒業段階では卒業者の平均が英検準 2 級～2 級程度」を提言している。TOEFL ITP[®] テストのスコアでは凡そ 400 点台と推定されることから、有効回答全てが、目標に達成、又は大きく上回る成績を保有していることが明らかになった。

なお、目的別、性別および専攻別でも保有する成績に大差がないことが示された。

英語以外に、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語などの資格試験の成績も 20 人(4.2%)から報告された。

表 2 保有する英語資格試験の成績 (有効回答 408)

TOEFL ITP [®] スコア相当	語学研修	ボランティア活動	全体
レベル1: ~399	4.60%	5.50%	4.9%
レベル2: 400~	11.40%	10.30%	11.0%
レベル3: 450~	42.00%	42.60%	42.2%
レベル4: 500~	32.00%	29.00%	31.1%
レベル5: 550~	9.30%	11.80%	10.1%
レベル6: 600~	0.70%	0.80%	0.7%

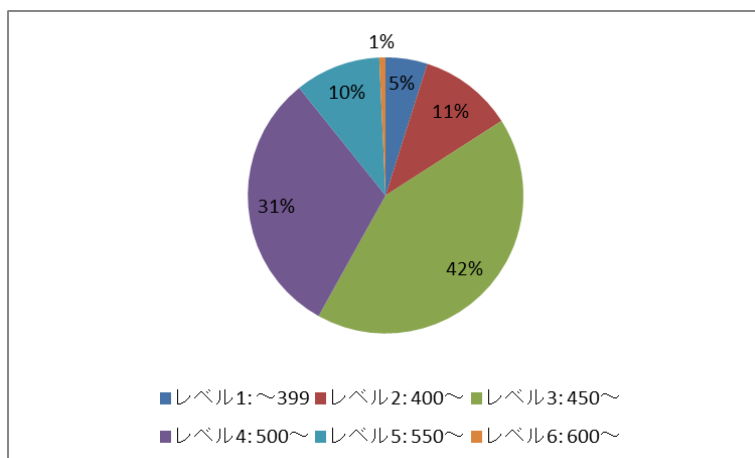


図 5 保有する英語資格試験の成績のレベル別割合 N=408

⁸ 日米教育委員会. アメリカ留学の基礎知識. <http://www.fulbright.jp/study/res/t1-college12.html#2>
(情報取得 2014/3/1)

⁹ 外国語能力の向上に関する検討 (2011). 国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策 ——英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向け——文部科学省

次節から、海外体験プログラムに参加する前と参加後に測定された質問項目の分析結果を報告する。

4.5 「外国語使用不安感」

「外国語使用不安感」は 6 件法で評定された。6 は「非常に不安だ」、1 は「全く不安でない」を意味する。参加前の平均値は 4.22 ($SD=1.20$)、参加後は 2.56 ($SD=.98$)であり、0.1%水準で有意に不安は減少していることが示された。つまり平均値は、「4 どちらかと言えば不安だ」から「3 どちらかと言えば不安ではない」に近い「2 あまり不安ではない」に下がったことを示唆している。

目的別では、参加前は、語学研修グループは平均値が 4.35 ($SD=1.17$) ボランティア活動グループは 3.96 ($SD=1.23$)であり、語学研修グループの方が、有意に不安が高かった ($F(1, 473) = 11.17, p=.001$)。しかし、参加後は、語学研修グループは 2.52 ($SD=.92$)、ボランティア活動グループは 2.65 ($SD=1.10$)と減少し、両グループ間では有意な差はみられなくなった ($F(1, 473) = 1.66, n.s.$)。性別や専攻別では、有意な差はみられなかった。

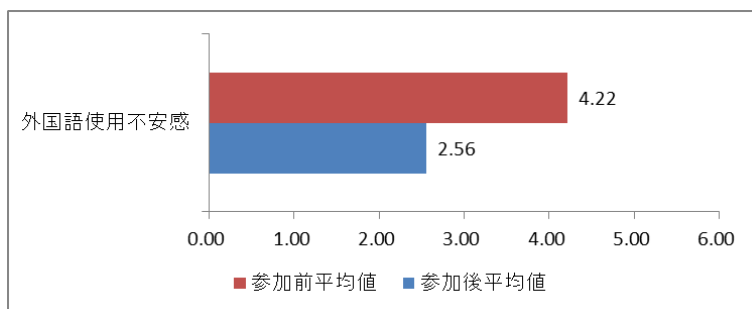


図 6 参加前と参加後の外国語使用不安感の平均値の比較 $N=475$

4.6 「自信感」とキャリアプランにおける「国際志向性」

4.6.1 対応のある t 検定の結果

「自信感」¹⁰の平均値と、キャリアプランにおける「国際志向性」に関する 4 つの質問である「1 年間交換留学の希望」¹¹「海外の大学院で学ぶ希望」「外国語を使用する仕事に就く希望」「海外で働く希望」はいずれも有意に平均値が高くなったことが示された(表 3)。

国際志向性に関する 4 つの質問の平均値を比較してみると、調査協力者は、海外の大学院で学ぶことはあまり希望していない傾向にあるが、外国語を使用する仕事に就くことをかなり希望していることが示された。

¹⁰ 「自信感」は 14 項目からなるが、本調査のサンプルを対象として因子分析を行ったところ、因子負荷量が .40 未満の項目が 1 つあったためそれを除いた。クロンバックの α 係数は .88 である。

¹¹ 475 人中 14 人 (2.9%) が 1 年間交換留学をする予定であると回答している。

表 3 自信感と国際志向性に関する質問項目の平均値・標準偏差と対応のある *t* 検定の結果 *N*=475

	参加前		参加後		差 Post マイ ナス Pre	<i>t</i>	<i>df</i>	<i>p</i>
	Mean	SD	Mean	SD				
自信感	4.11	.67	4.25	.72	.14	6.36	474	.000
1年間交換留学の希望	3.92	1.59	4.18	1.58	.26	3.69	474	.000
海外の大学院で学ぶ希望	3.15	1.51	3.36	1.63	.21	3.28	474	.001
外国語を使用する仕事に就く希望	4.60	1.23	4.86	1.25	.26	4.95	474	.000
海外で働く希望	4.26	1.33	4.52	1.39	.26	4.46	474	.000

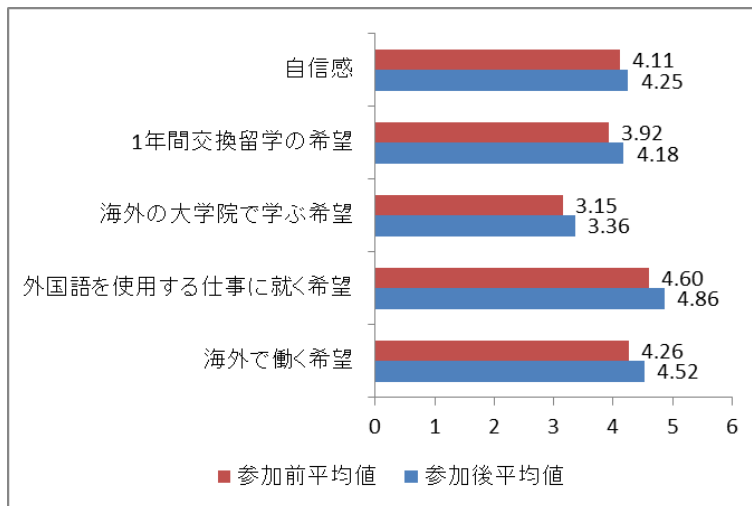


図 7 自信感と国際志向性に関する質問項目の参加前と参加後の平均値の比較

「自信感」については、参加前の平均値は 4.11 (*SD*=.67) で、どちらかと言えば自信があるレベルである。56.6%の協力者が肯定的に自己を評価し、10.9%がかなり「自信感」を持っていることが示された。参加後は、肯定的に評価した協力者が 66.3%、かなり「自信感」を持っている協力者が 14.3%に増加した(図 8)。

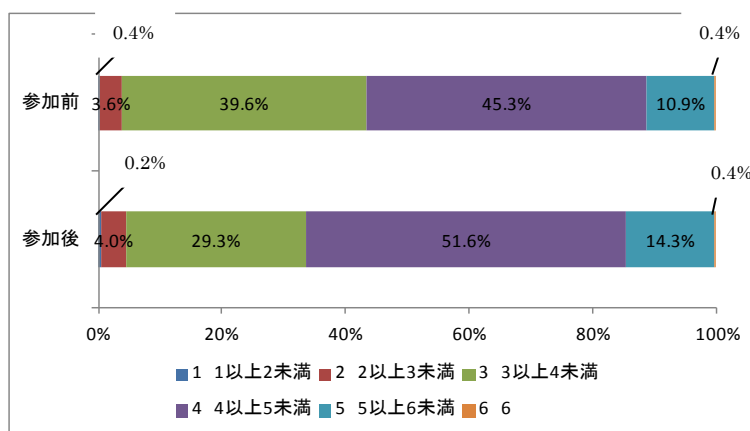


図 8 「自信感」の参加前後の比較

次に、海外体験プログラムに参加する前と後の「自信感」の変化に、性別、目的別、専攻別で差異があるのかを検証した(表 4)。

4.6.2 「自信感」の変化と性別要因

男女ともに「自信感」は有意に伸びたが、男女間で有意な差はみられない(図 9)。

4.6.3 「自信感」の変化と目的要因

語学研修グループ、ボランティア活動グループともに「自信感」が有意に伸び、ボランティア活動グループの方が、参加前も参加後も有意に「自信感」が高いことが示された(図 10)。

4.6.4 「自信感」の変化と専攻要因

Pre・Post 要因と専攻要因に交互作用が認められたため、単純主効果検定を行った。文系グループは参加後有意に「自信感」が伸び($F(1, 473)=46.82, p<.001$)、理系グループは有意な差がないことが示された($F(1, 473)=.36, n.s.$) (図 11)。また、参加前も参加後も専攻別では有意な差がみられなかった($F(1, 473)=.02, n.s. ; F(1, 473)=3.40, n.s.$)。

表 4 自信感の平均値・標準偏差と 2 要因混合計画分析の結果 N=475

		参加前		参加後		差 Post マイ ナス Pre		F	df	p
		Mean	SD	Mean	SD					
性別	男子学生 n=164	4.19	.70	4.32	.69	.13	Pre・Post要因 性別要因	34.61	473	.000 .062
	女子学生 n=311	4.06	.64	4.21	.73	.15				
	総和 N=475	4.11	.67	4.25	.72	.14				
目的	語学研修 n=323	4.05	.67	4.21	.71	.16	Pre・Post要因 タイプ要因	31.02	473	.000 .031
	ボランティア活動 n=152	4.21	.64	4.32	.74	.11				
	総和 N=475	4.11	.67	4.25	.69	.14				
専攻	文系群 n=381	4.11	.68	4.28	.72	.17	Pre・Post要因 専攻要因	交互作用が有意となった		
	理系群 n=94	4.10	.61	4.13	.70	.03				
	総和 N=475	4.11	.67	4.25	.72	.14				

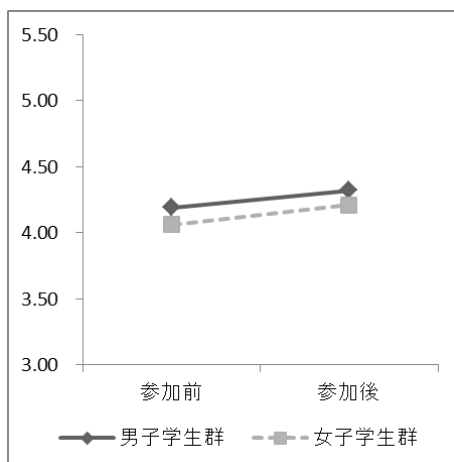


図 9 性別による自信感の変化の比較

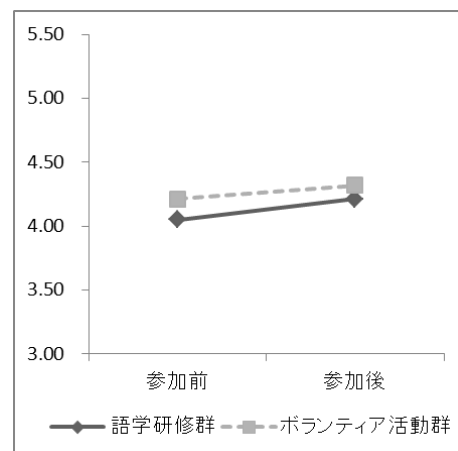


図 10 目的別による自信感の変化の比較

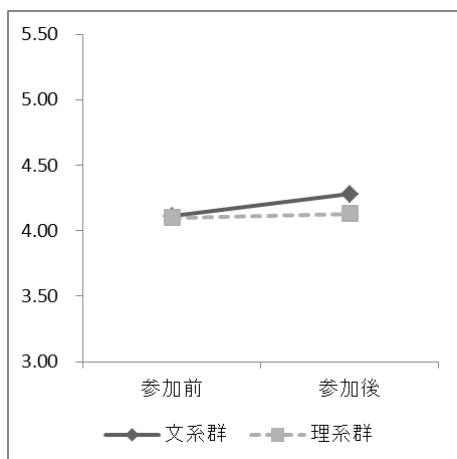


図 11 専攻別による自信感の変化の比較

目的要因と専攻要因において、「自信感」を構成する 4 つの因子別に差異を探索することを試みた。

4.6.5 「自信感」4 因子の変化(目的要因)

語学研修とボランティア活動の両グループともに海外体験後、「自信感」の平均値は伸びていることが示された。ボランティア活動グループの方が参加前も参加後も「自信感」が高いことが示され、「自信感」4 因子では「人間関係構築力」と「立ち直り力」で差異があることが示された(表 5)。

両グループに差異はあるものの、語学研修も平均値は 4 以上であり、半数以上が肯定的に自己をとらえていることが示された。また、参加前後の平均値の差は、語学研修グループの方が大きいことが示された。「有能感」の平均値は、両グループ間に有意な差はないが、海外体験前はボランティア活動グループの方が若干高かったが、体験後は語学研修グループの方が若干上回っている。

表 5 自信感 4 因子の平均値・標準偏差と 2 要因混合計画分析の結果(目的要因)

		語学研修 $n=323$, ボランティア活動 $n=152$, 総和 $N=475$								
		参加前		参加後		差 Postマイ ナスPre	F	df	p	
		Mean	SD	Mean	SD					
自己肯定感	語学研修	3.85	.93	3.99	.96	.14	Pre・Post要因	14.96	473	.000
	ボランティア活動	3.99	.89	4.12	1.02	.13				
	総和	3.89	.92	4.03	.98	.14	タイプ要因	2.41	473	.120
人間関係構築力	語学研修	4.49	.90	4.61	.94	.12	Pre・Post要因	6.11	473	.014
	ボランティア活動	4.76	.75	4.81	.81	.05				
	総和	4.58	.86	4.68	.91	.10	タイプ要因	9.12	473	.003
有能感	語学研修	3.78	.80	3.99	.85	.21	Pre・Post要因	22.57	473	.000
	ボランティア活動	3.82	.70	3.95	.88	.13				
	総和	3.80	.77	3.98	.86	.18	タイプ要因	.00	473	.980
立ち直り力	語学研修	4.32	.85	4.50	.85	.18	Pre・Post要因	17.41	473	.000
	ボランティア活動	4.53	.80	4.67	.88	.14				
	総和	4.39	.84	4.55	.86	.16	タイプ要因	6.87	473	.009

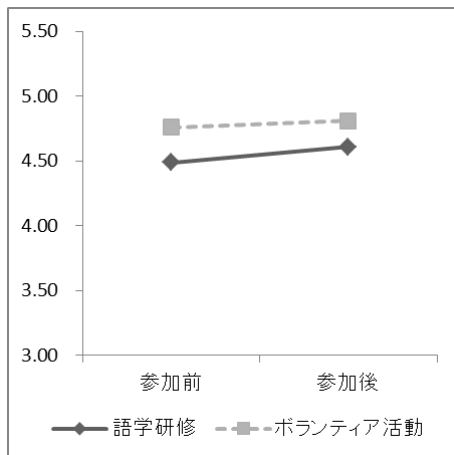


図 12 人間関係構築力の変化(目的要因)

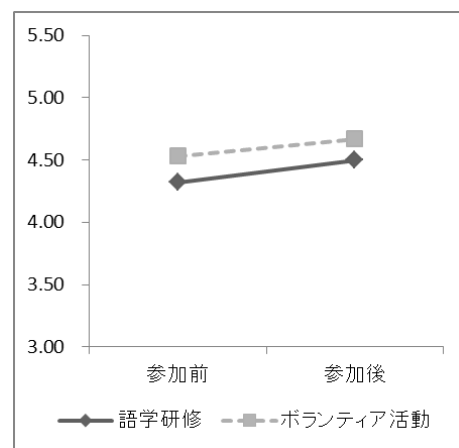


図 13 立ち直り力の変化(目的要因)

4.6.6 自信感 4 因子の変化(専攻要因)

文系グループは「自信感」が伸びたが、理系グループは「自信感」は変わらなかったこと、両グループ間には参加前も参加後も有意な差はないことが明らかになった(4.6.4)。

4 因子については、文系・理系グループともに、「自己肯定感」「人間関係構築力」「立ち直り力」は有意に伸びた事が示された(表 6)。

「有能感」に Pre・Post 要因と専攻要因に交互作用がみられたので単純主効果検定を行った。その結果、文系グループは「有能感」が有意に伸びたが($F(1, 473)=38.46, p<.001$)、理系グループは有意に伸びていないことが示された($F(1, 473)=.00, n.s.$) (図 14)。つまり、文系グループは、すべての因子におい伸びたこと、理系グループは「自己肯定感」「人間関係構築力」「立ち直り力」は僅かであるが伸びたものの、「有能感」に差異がみられなかったことが示された。

表 6 自信感 4 因子の平均値・標準偏差と 2 要因混合計画分析の結果(専攻要因)

		参加前		参加後		差	文系 $n=381$, 理系 $n=94$, 総和 $N=475$			
		Mean	SD	Mean	SD	Postマイ ナスPre		F	df	p
自己肯定感	文系	3.90	.93	4.07	.91	.17	Pre・Post要因	5.91	473	.015
	理系	3.87	.87	3.90	1.02	.03	専攻要因	.86	473	.354
	総和	3.89	.92	4.03	.98	.14				
人間関係構築力	文系	4.60	.87	4.71	.91	.11	Pre・Post要因	4.02	473	.046
	理系	4.49	.80	4.54	.90	.05	専攻要因	1.17	473	.141
	総和	4.58	.86	4.68	.91	.10				
有能感	文系	3.77	.76	4.00	.86	.23	Pre・Post要因	交互作用が有意		
	理系	3.90	.81	3.90	.85	.00	専攻要因			
	総和	3.80	.77	3.98	.96	.18				
立ち直り力	文系	4.39	.84	4.59	.87	.20	Pre・Post要因	7.03	473	.008
	理系	4.36	.84	4.40	.83	.04	専攻要因	1.54	473	.215
	総和	4.39	.84	4.55	.86	.16				

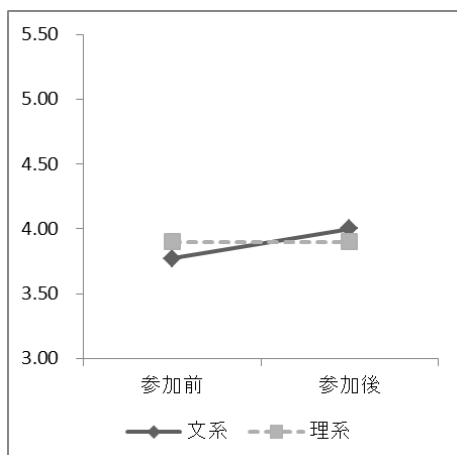


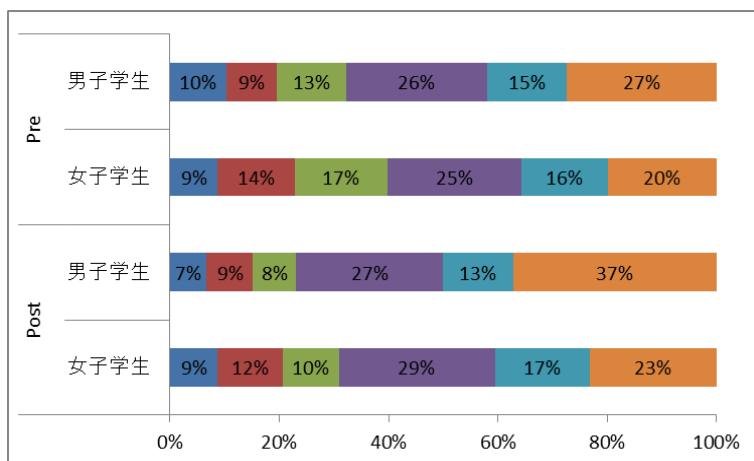
図 14 有能感の変化(専攻要因)

4.6.7 1年間交換留学の希望

目的別、専攻別では平均値に有意な差はみられなかったが、性別では、男子学生グループの平均値(参加前平均値 4.07, $SD=1.64$; 参加後平均値 4.43, $SD=1.57$)が、参加前も参加後も女子学生グループの平均値(参加前平均値 3.84($SD=1.57$); 参加後平均値 4.04, $SD=1.57$)より有意に高いことが示された($F(1, 473)=5.31, p<.05$)。

海外体験後、男子学生グループの 37%が 1 年間交換留学を「非常に」希望していることが明らかになり、肯定的な回答は 77%である。女子学生グループは 23%が「非常に」希望し、肯定的な回答は 69%である(図 15)。

「全く希望しない」という回答は女子学生グループには参加前後で変化がみられないが、男子学生グループは 10% から 7%に僅かに減少している。



■ 1 全くそう思わない ■ 2 あまりそう思わない ■ 3 どちらかと言えばそう思わない
■ 4 どちらかと言えばそう思う ■ 5 かなりそう思う ■ 6 非常にそう思う

図 15 1 年間交換留学の希望 (性別)

4.6.8 海外の大学院で学ぶ希望

目的別では平均値に有意な差はみられなかったが、性別と専攻別ではみられた。

性別では、男子学生グループの平均値(参加前平均値 3.49, $SD=1.57$; 参加後平均値 3.78, $SD=1.44$)が、参加前も参加後も女子学生グループの平均値(参加前平均値 2.97, $SD=1.44$; 参加後平均値 3.14, $SD=1.56$)より有意に高いことが示された($F(1, 473)=18.96, p<.001$)。海外体験後、男子学生グループの 24%が大学院での学ぶことを「非常に」希望し、女子学生グループは 10%が同様に希望していることが示された。肯定的な回答は男子学生グループが 58%、女子学生グループが 43%である(図 16)。

「全く希望しない」は参加前・後に、男性学生グループは変化がないが、女子学生グループは 17%から 19%へ若干上昇している。

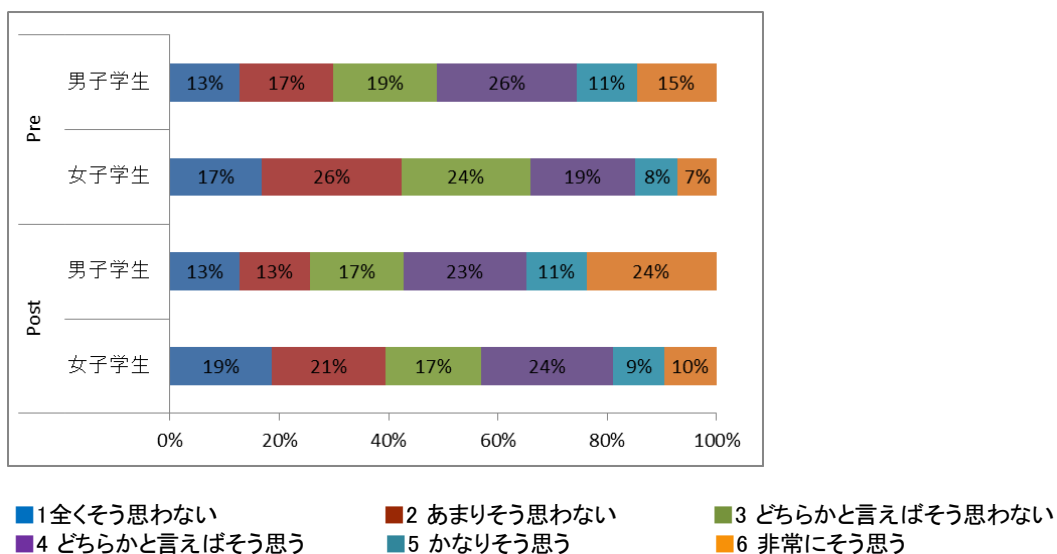
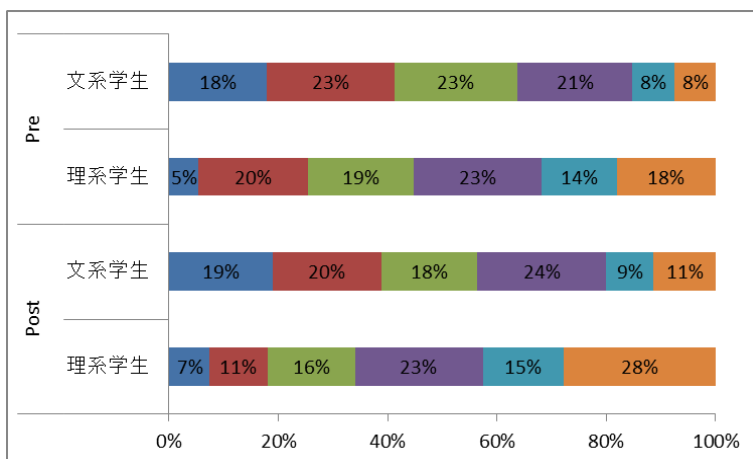


図 16 海外の大学院で学ぶ希望 (性別)

専攻別では、理系学グループの平均値(参加前平均値 3.75, $SD=1.52$; 参加後平均値 4.11, $SD=1.59$)が、参加前も参加後も文系学生グループの平均値(参加前平均値 3.00, $SD=1.47$; 参加後平均値 3.17, $SD=1.59$)より有意に高いことが示された($F(1, 473)=28.56, p<.001$)。海外体験後、理系学生グループの 28%が大学院での学ぶことを「非常に」希望し、文系学生グループは 11%が「非常に」希望していることが示された。肯定的な回答は理系学生グループが 66%であり、文系学生グループは 44%である(図 17)。



■ 1 全くそう思わない ■ 2 あまりそう思わない ■ 3 どちらかと言えばそう思わない
■ 4 どちらかと言えばそう思う ■ 5 かなりそう思う ■ 6 非常にそう思う

図 17 海外の大学院で学ぶ希望（専攻別）

4.6.9 外国語を使用する仕事に就く希望

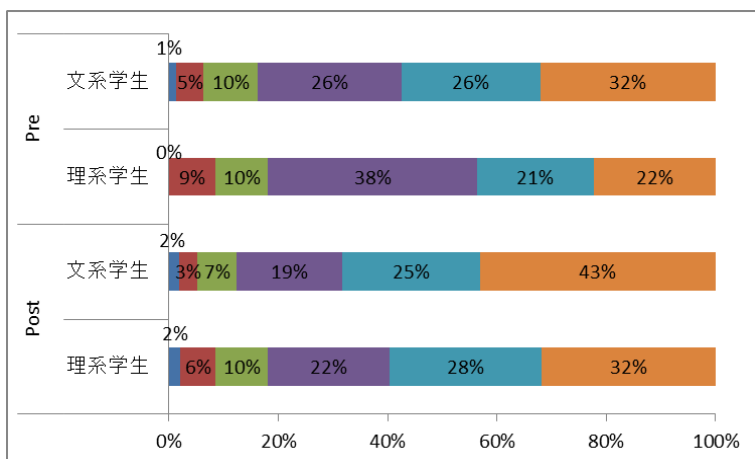
性別では有意な差はみられなかった。

専攻別では、文系学生グループの平均値（参加前平均値 4.65, $SD=1.24$; 参加後平均値 4.92, $SD=1.23$ ）が、参加前も参加後も理系学生グループの平均値（参加前平均値 4.39, $SD=1.18$; 参加後平均値 4.63, $SD=1.31$ ）より有意に高いことが示された ($F(1, 473)=4.42, p<.05$)。

海外体験後、文系学生グループの43%が外国語を使用する仕事に就くことを「非常に」希望し、理系学生グループは 32%が「非常」に希望していることが示された。肯定的な回答は文系学生グループが 87%、理系学生グループが 82%である(図 18)。

目的別では、ボランティア活動グループの平均値（参加前平均値 4.76, $SD=1.09$; 参加後平均値 4.99, $SD=1.30$ ）が、参加前も参加後も語学研修グループの平均値（参加前平均値 4.53, $SD=1.28$; 参加後平均値 4.80, $SD=1.22$ ）より有意に高いことが示された ($F(1, 473)=3.67, p=.001$)。

海外体験後、ボランティア活動グループの 50%が外国語を使用する仕事に就くことを「非常に」希望し、語学研修は 37 %が「非常」に希望していることが示された。肯定的な回答は、ボランティア活動グループも 85%であり、語学研修グループは 87%である(図 19)。



■ 1 全くそう思わない ■ 2 あまりそう思わない ■ 3 どちらかと言えばそう思わない
■ 4 どちらかと言えばそう思う ■ 5 かなりそう思う ■ 6 非常にそう思う

図 18 外国語を使用する仕事に就く希望（専攻別）

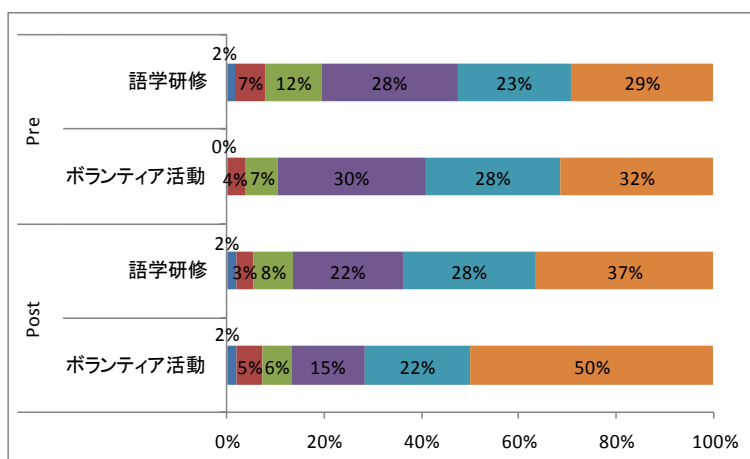


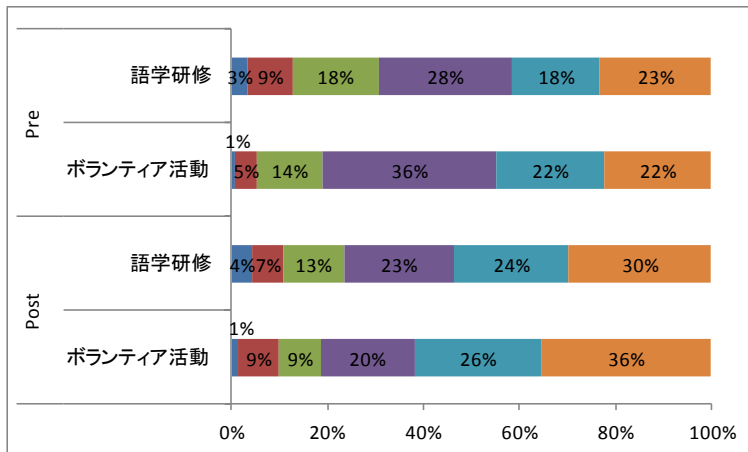
図 19 外国語を使用する仕事に就く希望（目的別）

4.6.10 海外で働く希望

性別と専攻要因では有意な差がみられなかった。

目的別では、ボランティア活動グループの平均値(参加前平均値 4.42, $SD=1.15$; 参加後平均値 4.68, $SD=1.34$)が、参加前も参加後も語学研修グループの平均値(参加前平均値 4.18, $SD=1.39$; 参加後平均値 4.44, $SD=1.42$)より有意に高いことが示された($F(1, 473)=3.93, p<.05$)。

海外体験後、ボランティア活動グループの 36%が海外で働くことを「非常に」希望し、語学研修グループは 30%が同様に希望していることが示された。肯定的な回答はボランティア活動グループが 82%で、語学研修グループは 77%である(図 20)。



■ 1 全くそう思わない ■ 2 あまりそう思わない ■ 3 どちらかと言えばそう思わない
■ 4 どちらかと言えばそう思う ■ 5 かなりそう思う ■ 6 非常にそう思う

図 20 海外で働く希望（目的別）

4.7 外国語力と自信感の関係性

4.7.1 外国語の向上感

訪問国で学んだ、又は使用した外国語の「聞く力」「話す力」「読む力」「書く力」が身についたか、4技能別に尋ねた。その平均値を目的別要因で比較したところ、身についたと肯定的に感じた割合は、語学研修グループは 70%であるが、ボランティア活動グループは 43%であり、語学研修グループの方が、身についた感の割合が高いことが示された(図 21)。語学研修グループは平均 4 週間滞在するのに対して、ボランティア活動グループは平均 2.5 週間であることを考慮しなければならない。

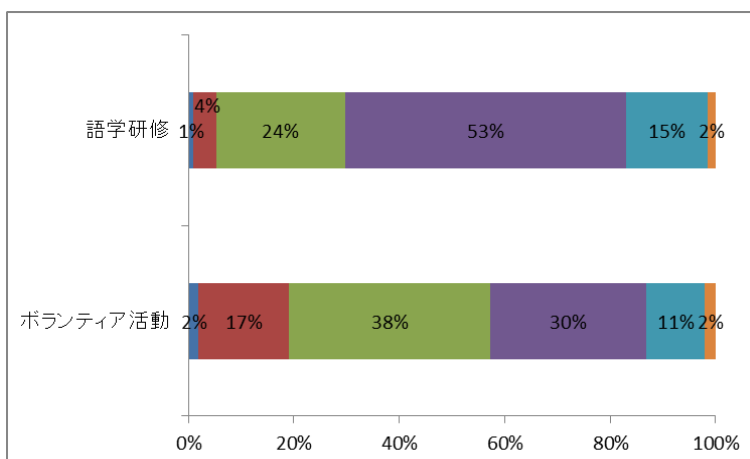
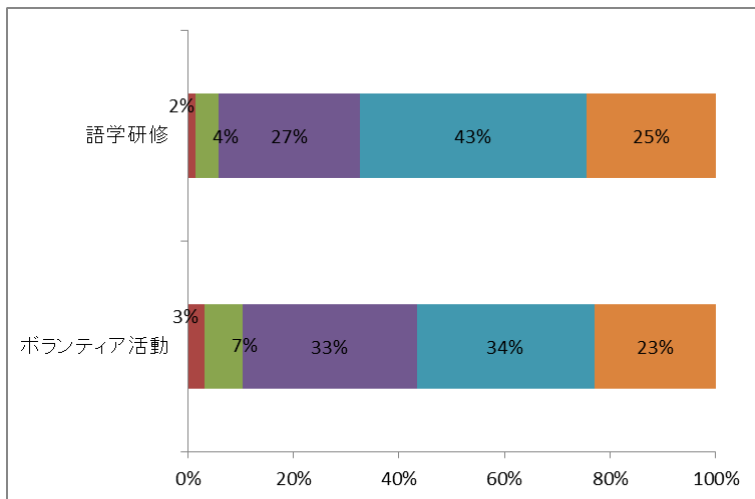


図 21 各 4 技能の評価の平均値

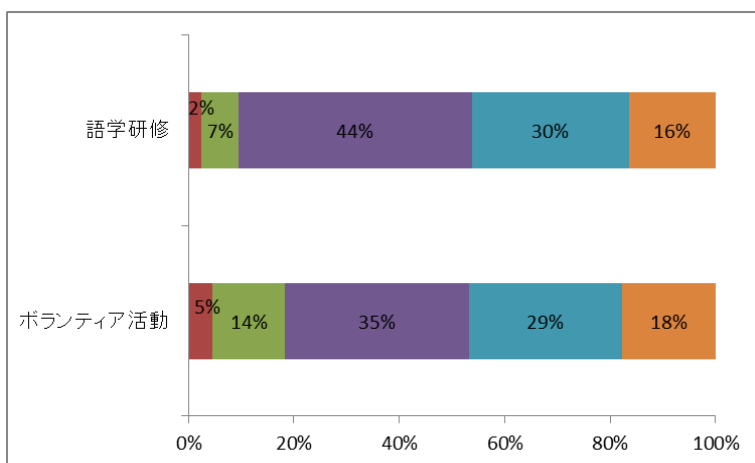
4 技能を個々に比較してみると、「聞く力」が身についた感覚の肯定的な評価は、語学研修グループは 94%、ボランティア活動グループは 90%である (図 22)。



- 1 全くそう思わない(2に合算)
- 2 あまりそう思わない
- 3 どちらかと言えばそう思わない
- 4 どちらかと言えばそう思う
- 5 かなりそう思う
- 6 非常にそう思う

図 22 「聞く力が身についた」の自己評価結果

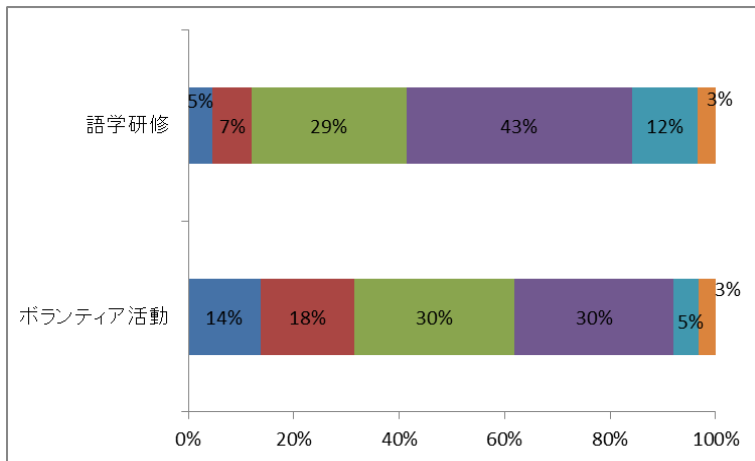
「話す力」が身についた感覚の肯定的な評価は、語学研修グループは 90%、ボランティア活動グループは 82%である(図 23)。



- 1 全くそう思わない(2に合算)
- 2 あまりそう思わない
- 3 どちらかと言えばそう思わない
- 4 どちらかと言えばそう思う
- 5 かなりそう思う
- 6 非常にそう思う

図 23 「話す力が身についた」の自己評価結果

「読む力」が身についた感覚の肯定的な評価は、語学研修グループは 58%、ボランティア活動グループは 38%である(図 24)、



■ 1 全くそう思わない ■ 2 あまりそう思わない ■ 3 どちらかと言えばそう思わない
■ 4 どちらかと言えばそう思う ■ 5 かなりそう思う ■ 6 非常にそう思う

図 24 「読む力が身についた」の自己評価結果

「書く力」の場合は、語学研修グループでは 65%、ボランティア活動グループでは 36%が肯定的な評価をしている(図 25)。

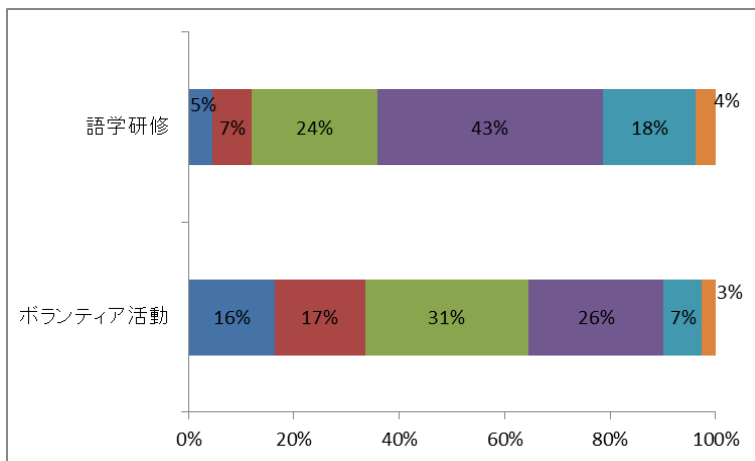
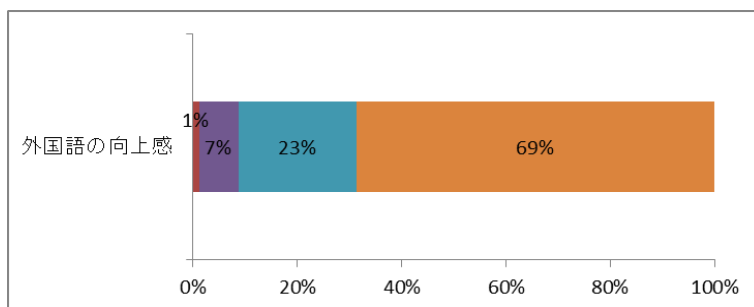


図 25 「書く力が身についた」の自己評価結果

以上の結果から、語学研修グループとボランティア活動グループでは、「聞く力」「話す力」が身についたという感覚的な自己評価に大差はないが、「読む力」「書く力」においてかなり差が示された。

4.7.2 外国語をより勉強したい意欲

海外体験後には、現地で学んだ又は使用した外国語をより勉強したいという意欲は、最も高い評定値 6(非常に勉強したいと思う)を 70%近くが回答した(図 26)。5(かなり勉強したいと思う)と合わせると 91.3%となる。属性による差異はみられなかった。海外体験を通して、外国語の学習意欲が高まったことを示唆している。



■ 1 全くそう思わない(2に合算) ■ 2 あまりそう思わない ■ 3 どちらかと言えばそう思わない
 ■ 4 どちらかと言えばそう思う ■ 5 かなりそう思う ■ 6 非常にそう思う

図 26 外国語をより勉強したい意欲

4.7.3 自信感が下がったグループと伸びたグループの比較

調査協力者の参加前後の自信感の差の範囲は-2.30~2.00である。自信感が下がったサンプルは約 30%であったため A グループとし、同じか上がったサンプルを.39を分岐点に分割し 0 以上.39 未満の値のサンプルを B グループ、.39 以上の値のサンプルを C グループとした。

この 3 グループ間で差がみられる変数は、「外国語使用不安感」「外国語を使用する仕事に就く希望」「海外で働く希望」である。各グループの参加前後の平均値を図 27~29 で表した。これらの値にグループ間で有意な違いがあるか否かを 2 要因混合計画分析で検証した結果(表 7)は別添資料 2 を参照されたい。なお、過去の海外滞在経験、保有する英語資格試験の成績、滞在中に学んだ、又は使用した外国語の向上感、さらに外国語を学ぶ意欲、留学の希望にはこれらの 3 つのグループ間には有意な差がみられなかった。

「外国語使用不安感」では、全てのグループともに海外体験を通して不安感が有意に下がったが、A グループは、参加前には B グループと C グループのいずれのグループよりも有意に不安感が若干低く、参加後は、C グループより不安感が若干高いことが示された。B と C グループ間では有意な差は示されていない。つまり、3 グループで不安感の平均値が最も高かったグループが参加後最も不安感が減少したことを示唆している。

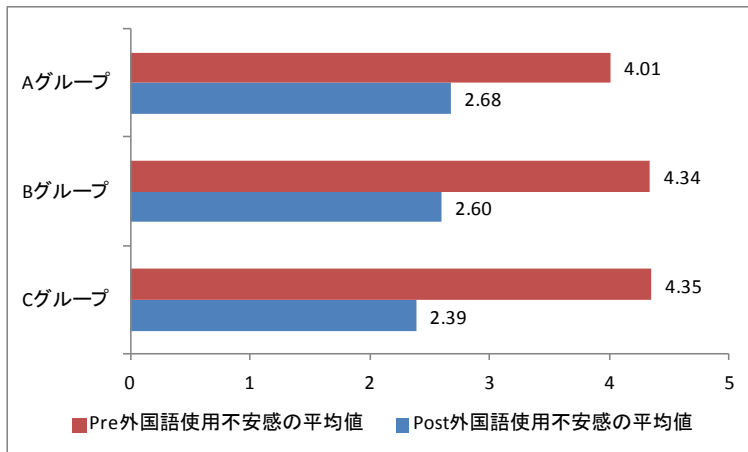


図 27 外国語使用不安感の参加前後の平均値

「外国語を使用する仕事に就く希望」では、B と C グループは参加後有意に希望が高くなったが、A グループは有意な変化がみられない。参加前も参加後も 3 グループ間には有意な差はみられないが、参加前は A グループの平均値が他のグループより若干高いことが示された。

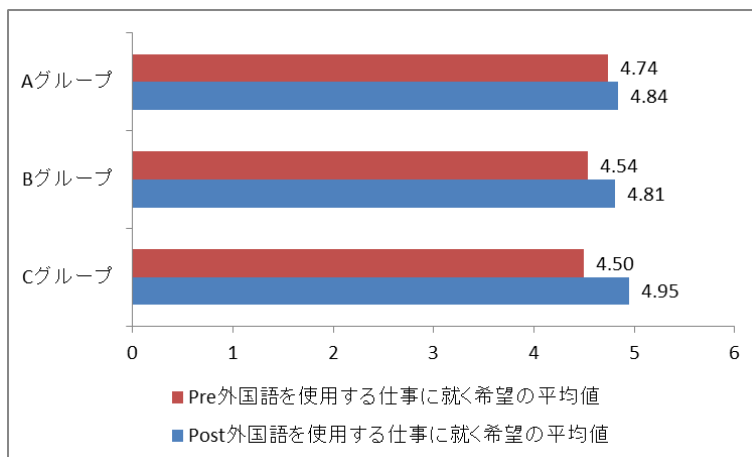


図 28 外国語を使用する仕事に就く希望の参加前後の平均値

「海外で働く希望」では、B と C グループは参加後有意に希望が高くなったが、A グループは有意な変化がみられない。参加前も参加後も 3 グループ間には有意な差はみられないが、A グループの参加前の平均値が他のグループより若干高いことが示された。

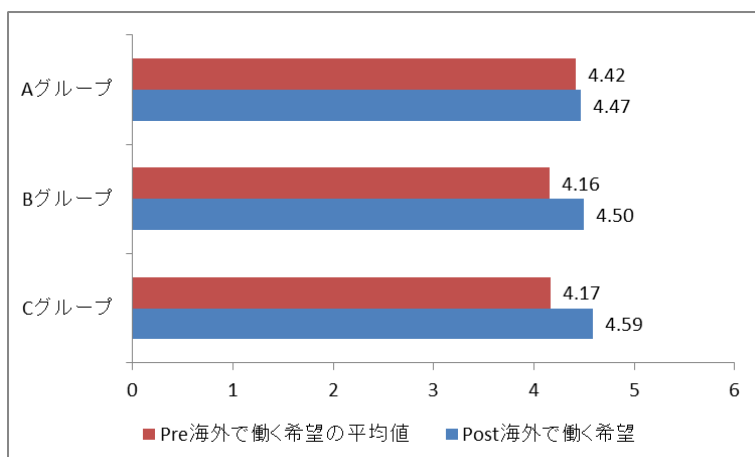


図 29 海外で働く希望の参加前・後の平均値

5. 結果のまとめと考察

5.1 調査協力者について

本調査の協力者 475 人は、首都圏の大学に所属する大学 2、3 年生が中心であり、その約 70% が過去に渡航経験を持っていること、TOEFL ITP[®] テストスコアが 450~550 相当の英語力を持つ者が 70%であったことから、平均的な日本人学生より高い英語力を持っていることが明らかになった。男子学生は 34%、女子学生は 66%で、理系が 20%、文系が 80%である。ボランティア活動グループより、語学研修グループの方が、理系男子学生の割合が若干高く、文系女子学生の割合が若干低くなっている。また、訪問国については、語学研修グループは約 90% が英語圏に滞在し平均滞在期間は 4 週間、ボランティア活動グループは約 55%が英語圏で平均滞在期間は 2.5 週間であった。

5.2 「自信感」およびキャリアプランにおける「国際志向性」は参加後伸びた。

「自分のあり方に自信を持っている感覚、あるいは、自分に対して自信をもって生きていると感じられていること」という「自信感」が、海外体験によって向上したことが示唆された。平均値は 4.11 から 4.25 に上昇し、肯定的に評価した協力者(評定が 4~6)は 56.6%、参加後は 66.3%に増加した。同時期に海外体験をしない統制群との比較を行わなかったために、この上昇が海外体験による効果であるとその妥当性を確かなものにはできない。しかし、自信感尺度は自尊感情尺度と高い相関関係があり(高井, 2011)、海外体験による自尊感情の向上を報告する先行研究があることから、「自信感」の向上は海外体験の影響によると推定してよいであろう。

「国際志向性」については、「1年間交換留学の希望」「海外の大学院で学ぶ希望」「外国語を使用する仕事に就く希望」「海外で働く希望」の 4 項目に回答してもらったが、いずれも伸びた。

5.3 ボランティア活動参加者は語学研修参加者に比べ参加前、参加後ともに「自信感」が高く、特に「人間関係構築力」「立ち直り力」が高かった。しかし、語学研修参加者の方が「自信感」の伸び

幅は大きかった。

ボランティア活動参加者が、参加前後ともに語学研修参加者より「自信感」の平均値、特に「人間関係構築力」「立ち直り力」が僅かではあるが有意に高いことが示された。語学研修は、大学が参加者を募集し団体に派遣するため、交通手段もすべて旅行会社によって手配され移動も団体行動である。また、語学学校には日本人が 100 人以上一緒になることもあり困った時には頼れる仲間が多い。一方、ボランティア活動は、基本的に個人参加なので交通手段は自ら手配し、また目的地まで 1 人で行動するケースが多く、トラブルに遭遇する確率も高いため「立ち直り力」が求められる。滞在中も、英語を使用して周りの人々と良好な人間関係を構築し、受け入れ団体の企画に貢献することが期待されるので、情動面、行動面の負荷が高い。よって、その困難さを予知して自分はやっていけるという自信がある学生が申し込んでいるといえよう。また、体験によってそれらの力が更に伸びたことが示された。

語学研修参加者は「有能感」の伸びがボランティア活動参加者に比べ大きい。語学研修参加者はボランティア活動参加者より外国語力の向上を感じた割合が高いことが要因ではないかと考えられる。また、「人間関係構築力」の伸びも大きいことから、クラスメートやホストファミリーとの良好な人間関係作りを心掛けたと推察できる。

5.4 理系の学生は「自信感」はあまり変わらなかった。

文系学生が「自信感」が有意に伸びたのに対して、理系学生はほとんど変化がみられなかった。「自信感」を構成する 4 因子「自己肯定感」「人間関係構築力」「有能感」「立ち直り力」を検証したところ、理系学生は平均値にほとんど変化がない。すでに持っている英語資格試験の成績や、過去の渡航経験、今回の海外体験による英語力の向上感、英語使用不安感の減少に両グループの差はみられないため、要因は今回の調査では特定できない。しかし、敢えて、Kolb (1984)¹²の経験学習理論に基づいて理系学生の特性から推察してみたい。短期の海外体験は、自文化と異なる国や地域で生活し、「具体的な経験」を通してこれまで馴染んできたものと異なる生活様式や、考え、価値観や人々の行動を「感性的な理解として把握」しながら、身を置くコミュニティで新たな人間関係を構築しながら自分の役割(例えば、語学学校の学生、ホームステイは家族の一員、教師のアシスタント)を遂行する「活動的な実験」の機会であると言えよう。深い思考を要する抽象的な概念化や 1 つの正解を追求する学習スタイルを持つと考えられる理系学生は、「感性的な理解」を「抽象的な概念化」のレベルまで思考しないと自己意識は影響を受けないのであろうか。

理系の学生が参加した語学研修は特別企画のコースの場合もあり、専門分野の視察内容が少し難しすぎたという報告もあることから、研修内容が「自信感」の伸びに影響した可能性も推察できる。

¹² Kolb, D. (1984). *Experiential Learning*. Prentice Hall, Inc., New Jersey.

5.5 語学研修参加者の方が、参加後の外国語力の向上感が高かった。

語学研修参加者とボランティア活動参加者では、「聞く力」「話す力」が身についたという感覚的な自己評価に大差はないが、「読む力」「書く力」においてかなり差が示された。ボランティア活動参加者は、滞在中に活動を遂行するために受け入れ団体の関係者や活動の対象となる人々、ボランティア活動仲間と対話をする機会が多いが、読んだり、書く行為は限られている。一方、語学研修では 4 技能を総合的に向上できるようにカリキュラムを語学学校が組んでいるため、授業や宿題を通して読む、書く活動が課せられていることが理由と考えられる。また、語学研修期間は平均 4 週間であったのに対し、ボランティア活動は 2.5 週間であったことから、滞在期間も差異の要因と考えられる。やはり、英語力を伸ばすことを目的とするのであれば、語学研修の方が適しているといえよう。

5.6 さらに外国語を勉強する意欲が高まった。

参加後には、現地で学んだ又は使用した外国語をより勉強したいという意欲は、最も高い評定値 6(非常に勉強したいと思う)を 70%近くが回答し、5(かなり勉強したいと思う)と合わせると 91.3%となる。性別、専攻別、目的別による差はなかった。海外体験により、外国語の学習意欲が非常に高まったといえよう。この意欲の高まりをどのようにして持続させ、外国語力を伸ばせる場を学生に持たせるかが課題である。

5.7 海外留学の希望は女子学生より男子学生の方が高い。

1 年間交換留学や大学院留学は、男子学生の方が、希望が高い結果が示された。海外体験後、1 年間交換留学を非常に希望する男子学生は 37% に対して女子学生は 23%、大学院留学は男子学生が 24%、女子学生は 10% である。男子学生の割合は 35%と女子学生より低いことから、キャリアプランにおいて国際志向性が高い層の学生が参加をしているといえそうである。

5.8 大学院留学の希望は文系学生より理系学生の方が高いが、外国語を使用する仕事に就く希望は文系学生の方が高い。

海外体験後、理系学生は 28%が大学院留学を非常に希望しているのに対して、文系学生は 11%である。一方、外国語を使用する仕事に就く希望は、文系学生の 53%が非常に希望し、理系学生は 32%である。

5.9 ボランティア活動参加者の方が、語学研修参加者よりも仕事における国際志向性が高い。

外国語を使用する仕事に就く希望は、ボランティア活動参加者の 50%が「非常に希望する」と答え、肯定的な回答は 87%に上る。語学研修参加者は 37%が「非常に希望する」と答え、87%が肯定的に答えている。

海外で働く希望は、ボランティア活動参加者の 36%が「非常に希望」し、肯定的な答えは 82%に上る。一方、語学研修参加者は 30%が「非常に希望」し、肯定的な答えは 77%である。

ボランティア活動参加者は「英語を使用して何かをしたい」というのが参加の第 1 希望であることから、将来のキャリアにおいても同じ志向性を持っているといえる。

調査の対象が異なるので単純に比較はできないが、海外で働くことへの若者の関心に関する 2 つの調査結果を紹介する。一つは、「産学官連携によるグローバル人材の育成のための戦略¹³」である。新入社員を対象とした調査では、51%が「どんな国・地域でも働きたい」「国・地域によっては働きたい」と答えている (p. 35)。二つ目は、平成 25 年版厚生労働白書¹⁴において、20 代の若者の海外就労意欲で「関心がある」「どちらかといえば関心がある」が 40%を占めている (p.141)。

5.10 「自信感」が減少した参加者は、英語を学ぶ意欲や国際志向性に大きな負の影響を及ぼすほど自信を喪失したわけではなかったようだ。

「自信感」が減少した参加者は、同じか上昇した参加者と比べ、参加前の「外国語使用不安感」の平均値はやや低く、「外国語を使用する仕事に就く希望」や「海外で働く希望」はやや高い平均値を示している。参加後は、「自信感」が同じか上昇した参加者に比べ、「外国語使用不安感」の平均値はやや高止まりしているとはいえ大差はなく、「外国語を使用する仕事に就く希望」や「海外で働く希望」の平均値も下がってはいない。また、さらに外国語を勉強したい意欲にも「自信感」が同じか上昇した参加者と比べ差はみられなかった。

6. 海外派遣についての提言

以上の結果から、いくつかの提言を試みたい。

1) 理系の学生は、専門分野と卒業後のキャリアが文系に比べると直結しており、大学院への留学希望も高いことから、海外研修には語学の授業以外に、専門分野に関するテーマを扱った講義や関連施設訪問などを組み込むことが彼らの海外研修への関心を高め、また、研修の効果も高まると考えられる。

2) 「自信感」の伸長に、「人間関係構築力」と「立ち直り力」が大きく影響していることが分かった。葛藤や困難に直面し、落ち込んだ時には、独りで抱えずに、周りの人に適切な助言や協力を求めることも立ち直るにための 1 つの手段であり、また人間関係を広げる機会ともなる。事前研修では、過去の参加者の体験談から葛藤や困難に直面した状況を、ケース・スタディとして取り上げ、DIE (The Description, Interpretation, and Evaluation Exercise)¹⁵のプロセスで状況を分析する手順を学んだり、どのように解決するかなどを参加者同士で複眼的に議論し心の準備をしておくことが、現地での対応に役立つものとする。また、どのように相手とコミュニケーションをとるのが効果的か、

¹³ 産学連携によるグローバル人材育成推進会議(2011). 産学官によるグローバル人材の育成のための戦略 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf

¹⁴ 厚生労働省. 2013. 平成 25 年度版厚生労働白書——若者の意識を探る——

<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/>

¹⁵ © 2008 Intercultural Communication Institute, <http://www.intercultural.org/die.php>

どのような英語表現が適切かなどの事前学習が人間関係構築力の育成を助けると考える。

3) 学生が海外体験を振り返り、経験に意味づけをすることが次の経験をより豊かなものにする
から、事後研修に取り組む大学が増えている。同じ経験をしてもらえ方は学生によりまちまち
である。本調査では、文系と理系学生の「自信感」の変化に差があることが示された。学生同士が
共に経験を振り返り、お互いの感想や意見を交換する機会を設けることを提案したい。自らの経験
を複眼的に省察することで経験の意味づけを再構築することも可能となろう。失った自信を取り戻
すこともできるかもしれないし、表層的なレベルの理解であったことに気づくかもしれない。

おわりに

統制群を置かなかったため、「自信感」や「国際志向性」の伸びが海外体験の効果であると主張
する妥当性を確かに行えないのが限界である。また、有効回答が約 20%であり、経験を肯定的に
捉えている参加者が調査に協力する傾向にあることも否めない。しなしながら、実務を通じて感じ
ていた学生の意識の変容を数値化できたことは、短期の海外体験の効果の周知に多少なりとも貢
献できたのではないかと思う。また、性別や、専攻別、目的別で比較した結果は、海外体験プログ
ラムの企画や募集方法にも参考としていただけるのではないかと思う。

自信感尺度を調査に使用したことで、「自己肯定感」「有能感」に加え「人間関係構築力」と「立
ち直り力」が「自信感」の形成要因であること、またこの2つの力の自己評価が、学生の個人型参加
のボランティア活動の選択に影響を及ぼしていることを明らかにすることができた。海外派遣事業
に関わられている方々は、この2つの力の重要性が実証されたことにご納得されるのではないかと
思う。

謝辞

本調査研究にご協力いただいた大学関係者の皆様、そして、web 調査に回答くださった皆様
に心より感謝申し上げます。

別添資料 1

自信感尺度 (※は逆転項目)

- 1 私は自分の仕事(役割・勉強など)をうまくこなす力がある。
- 2 私は自分の欠点ばかりが目につき、自分がいやになる。 ※
- 3 私はいろいろな人間関係をととても楽しいと感じている。
- 4 私は失敗やうまくいかないことが多いと感じている。 ※
- 5 私は少々つらいことがあっても乗り越えていく力がある。
- 6 私は人間関係がうまくいかないことが多い。 ※
- 7 私は何をやってもダメな人間だと感じている。 ※
- 8 私は能力のある人間だと思う。
- 9 私は、ささいなことでも落ち込み、なかなか立ち直れない。 ※
- 10 私はいろいろな良い素質をもっている。
- 11 私にとって人間関係は苦痛である。 ※
- 12 私は、何かうまく行かないことがあるとすぐにくじけてしまう。 ※
- 13 私は自分に対する不満が多い。 ※
- 14 私は大抵の人とうまくつき合っていくことができる。

自信感尺度因子分析結果

クロンバックの α 係数 = .88

自己肯定感	13. 私は自分に対する不満が多い ※	.79	.07	-.03	-.09
	2. 私は自分の欠点ばかりが目につき、自分がいやになる ※	.77	.07	-.04	-.03
	4. 私は失敗やうまくいかないことが多いと感じている ※	.70	.04	.03	-.02
	7. 私は何をやってもダメな人間だと感じている ※	.69	.11	.07	.03
	9. 私は、ささいなことでも落ち込み、なかなか立ち直れない ※	.53	-.15	.02	.30
有能感	8. 私は能力のある人間だと思う	.06	.89	-.04	-.03
	10. 私はいろいろな良い素質をもっている	.05	.77	.02	.01
	1. 私は自分の仕事(役割・勉強など)をうまくこなす力がある	.07	.37	.07	.23
人間関係構築力	3. 私はいろいろな人間関係をととても楽しいと感じている。	-.07	.01	.79	.02
	11. 私にとって人間関係は苦痛である ※	.19	-.14	.73	-.01
	14. 私は大抵の人とうまくつき合っていくことができる	-.05	.10	.65	-.03
立ち直り力	12. 私は、何かうまく行かないことがあるとすぐにくじけてしまう ※	.24	-.12	-.09	.65
	5. 私は少々つらいことがあっても乗り越えていく力がある	-.19	.22	.10	.64
因子寄与		4.87	1.14	.89	.39
累積寄与率		37.42	46.21	53.02	55.98

削除した項目

6. 私は人間関係がうまくいかないことが多い ※

診断的な目的で、自信感尺度を利用する際の、エクセルによる回答値の処理方法

1. 逆転項目を以下の計算式で導き出される数値に置きかえる。
(項目の得点最小値) + (項目の得点最高値) - 当該の回答者の得点
2. 質問項目 6 は削除し対象から外す。
3. 自信感の平均値は、質問項目の合計得点を項目数で割った値。
4. 自信感尺度を構成する 4 つの因子ごとの数値を検証する場合には、上記の分析結果で示している各因子が持つ質問項目の合計得点を項目数で割った平均値を算出する。

別添資料 2

表 7 参加前後の自信感の差による 3 グループの比較 N=475

	Aグループ	Bグループ	Cグループ
自信感の参加前後の差	-2.31=<0.00	0.00=<0.39	0.39=<2.00
サンプルサイズ	172	154	148
Pre外国語使用不安感の平均値	4.01 (SD=1.20)	4.34 (SD=1.27)	4.35 (SD=1.10)
Post外国語使用不安感の平均値	2.68 (SD=1.06)	2.60 (SD=1.00)	2.39 (SD=0.84)
外国語使用不安感の差(Post-Pre)	-1.33	-1.74	-1.96
「Pre・Post」要因の主効果の検定結果	$F(1, 472)=201.12, p<.001$	$F(1, 472)=310.41, p<.001$	$F(1, 472)=375.35, p<.001$
グループ間の有意な差の検定結果	参加前 A<B $F(1, 472)=6.44, p<.05$, A<C; $F(1, 472)=6.44, p<.05$ BとCには有意な差はない $F(1, 472)=.00, n.s.$ 参加後 A<C $F(1, 472)=7.25, p<.05$; AとCには有意な差はない $F(1, 472)=0.61, n.s.$ BとCには有意な差はない $F(1, 472)=3.47, n.s.$		
Pre外国語を使用する仕事に就く希望の平均値	4.74 (SD=1.18)	4.54 (SD=1.21)	4.50 (SD=1.30)
Post外国語を使用する仕事に就く希望の平均値	4.84 (SD=1.29)	4.81 (SD=1.21)	4.95 (SD=1.25)
外国語を使用する仕事に就く希望の差(Post-Pre)	.10	.27	.45
「Pre・Post」要因の主効果の検定結果	$F(1, 472)=1.69, n.s.$	$F(1, 472)=11.78, p=.001$	$F(1, 472)=31.94, p<.001$
グループ間の有意な差の検定結果	参加前グループ間に有意な差は無い $F(2, 472)=1.86, n.s.$ 参加後グループ間に有意な差は無い $F(2, 472)=.52, n.s.$		
Pre海外で働く希望の平均値	4.42 (SD=1.35)	4.16 (SD=1.28)	4.17 (SD=1.34)
Post海外で働く希望の平均値	4.47 (SD=1.46)	4.50 (SD=1.29)	4.59 (SD=1.43)
海外で働く希望の差(Post-Pre)	.05	.34	.42
「Pre・Post」要因の主効果の検定結果	$F(1, 472)=.29, n.s.$	$F(1, 472)=13.83, p<.001$	$F(1, 472)=20.80, p<.001$
グループ間の有意な差の検定結果	参加前グループ間に有意な差は無い $F(2, 472)=2.10, n.s.$ 参加後グループ間に有意な差は無い $F(2, 472)=.33, n.s.$		